枝は淡黃色である。このものは Dykes 其他の人によれば所謂 German Iris 群 (*I. squalens*, *I. sambucina*, *I. lurida*, *I. flavescens* 等) の原種として，*I. pallida*, *I. aphylla* 等と共に自然或は人工交配の親となつてゐるものであるが，どう言ふものか日本では交配種の方が有名で元の本種は忘れられてゐて，園藝の書物等にも擧げられてゐない。小生の調べたものは佐竹義輔博士及び日本女子大の山崎みち教授の邸に於て栽培されてゐるものであるが，これらは共に *Iris* 屬園藝の本場たる英國から明治中期以後に直接輸入されたものである。勿論小生の見たものは原種其物ではなく，一度交配されたものが再び原種に近いものを分離したものかも知れないし，又 *I. variegata* そのものの種々の園藝品種の一とも考へられるが，とにかく原種に酷似したものである。

日本に最も早く輸入された歐洲系 *Iris* は同じく Pogoniris 節に屬する *I. florentina* で花戸では往々，同じく白色の花を開くシロバナイチハツと間違はれてゐる。これが慶應3年パリー萬國博覽會に參列した田中芳男先生の持參歸國された土産であることは周知の事實である。これは同學の醫者にして本草學者であつた阿部櫟齋氏の邸宅でも栽培され「阿部イリス」と稱せられてゐたことは同氏の孫一三氏の言によつて明かとなつた。このものの根莖を粉末にしたものは矯臭藥，健胃藥となり，齒磨粉に加へられることにより有名であるが，櫟齋氏も「寄應丸」を調合して發賣してゐたと言ふから，パリー土産は早速この丸藥にも應用されたことであらう。明治になつて櫟齋氏が北海道開拓使の役人になつた時も留守の妻女に對してこの植物の培養上の注意を細々と書き送つてゐるが，當時は貴重品として餘程大切にされたものであらう。

○最近の植物分類學の動き　（原　寬）

戰時中の外國文獻の中で日本植物に直接關係のある研究やモノグラフに就ては昨年から本誌上で少しづつ紹介して來た。併しそれ以外にそうしてそれ以上に專門家が關心を持つのは，分類學の今後の行き方を示しその理論を扱つた論文が多い事で，次に年代順にその例を拾つて見よう。

Clausen, Keck & Hiesey 1940 & 45 Experimental Studies on the nature of the species. I, II. Carnegie Inst. Wash. Publ. no. 520, 452 p.; no. 564, 174 p.

Dobzhansky 1941 Genetics and the origin of species. ed.2, 446 p.

Gilmour & Turrill 1941 The aim and scope of taxonomy. Chron. Bot. 6: 217-

Clausen 1941 On the use of the terms "subspecies" and "variety." Rhodora 43: 157-167.

Fernald 1942 Some historical aspects of plant taxonomy. l.c. 44: 21-43.

Fosberg 1942 Subspecies and variety. l.c. 44: 153-157.

Weatherby 1942 Subspecies. l.c. 157-167.

Huxley 1942 Evolution, the modern synthesis. 645 p.
Turrill 1942 Taxonomy and phylogeny. Bot. Rev. 8: 247-270, 473-532, 655-707.
Verdoorn 1942 The future of our large institutions of systematic botany. Chron. Bot. 7: 61-64.
Gregor 1942 The units of experimental taxonomy. l.c. 7: 193-196.
Stebbins 1942 The concept of genetic homogeneity as an explanation for the existence and behavior of rare and endemic species. l.c. 7: 252-253.
Cheadle 1942 The role of anatomy in phylogenetic studies of the Monocotyledoneae. l.c. 7: 253-254.
Bremekamp 1942 Controversial questions in taxonomy. l.c. 7: 255-258.
Turrill 1942 Experimental attacks on species problems. l.c. 7: 281-283.
Åberg 1943 Problems in the classification of cultivated plants. l.c. 7: 375-378.
Hopp 1943 Multiple measures for distinguishing closely related plant forms. l.c. 7: 402-403.
Weevers 1943 The relation between taxonomy and chemistry of plants. Blumea 5: 412-421.
Camp & Gilly 1943 The structure and origin of species. Brittonia 4: 323-385.
Svenson 1943 Modern taxonomy and its relation to geography. Torreya 43: 44-49.
Cain 1944 Criteria for the indication of center of origin in plant geographical studies. Torreya 43: 132-154.
Weimarck 1945 Experimental taxonomy in *Aethusa cynapium*. Bot. Notiser 1945, 351-380.
Taylor 1945 Cytotaxonomy and phylogeny of the Oleaceae. Brittonia 5: 337-367.
Gibbs 1945 Comparative chemistry as an aid to the solution of problems in systematic botany. Trans. Roy. Soc. Canada ser. 3, 39: 71-103.
Turrill 1946 The ecotype concept. New Phytol. 45: 34-43.
Just 1946 The use of embryological formulas in plant taxonomy. Bull. Torrey Bot. Cl. 73: 351-355.

これ等の題目を見ただけで直ぐ感じられる事は，分類學 (Taxonomy) が從來よりも更に密接に細胞遺傳學·植物地理學·生態學·解剖學·發生學·植物化學等と關聯して發展しつつあるといふ事であり，同時に今迄兎角缺けて居た分類に對する理論的根據を求めつつある事である。

分類學は人間の生活に直接關係のある生物を見分ける實際的必要から始つた生物學の最初の學科である。リンネが現在の正統 (orthodox) 分類學の第一歩を踏み出してから150 年以上もの間，分類學者は多くの犧牲を拂つて未踏の地に採集を行ひ，蒐集した腊葉とルーペとを手にして外部形態的性質と文獻を便りに地球上にどの様な植物が存在す

るかを調べ，これに一定の學名を與へる極めて手數のかかる困難な仕事に大部分の時間を費して來たのである。そうして多くの資源植物が發見され利用され，人類の福祉と生物學の他の分科の發達に偉大な貢献をなして，當時の分類學はそれだけで充分の意義があつたのである。併し今日の分類學者は決してこの様な仕事にのみ專念しそれで滿足して居るのではない。凡ての生物學の具體的な基礎として出發した分類學は，今や凡ての學科の知識と研究とを吸收してこれを綜合して行く學問となつたのである。

植物の分布が明かになるにつれて，植物地理學は各地のフローラの成立を考察し，又隔離や適應によつて如何にして植物群 (plant population) が存續し又は變化して行くかといふ生物の進化に對する理論へも重要な資料を提供しつつある。最近細胞遺傳學が著しい進歩をなすに伴つて生物の進化に就ての理論が發達して，これが分類學に大きな示唆を與へて居る。そこに實驗分類學 (Experimental taxonomy) 或は，生分類學 (Biotaxonomy) 又は細胞學的分類學 (Cytotaxonomy) とも云はれる新分野が開拓されつつある。ここでは從來の基準標本と云ふ様な考を全く離れて，自然に於て或る植物群が他と區別されるに至つた過程 (process) が重視され， 植物群と植物群との關係を實驗的に理論的に追求し様と試みる。この方法は分布の廣い變化の多い植物群の研究に對しては極めて有効であるが，大きな植物群（例へば門，綱，科等）間では實驗を行ふ事ができないので主に屬以下の關係を明かにするのに用ひられる。併し實際には色々な困難があり，先づ單位 (unit) の取り方が，問題になるが，植物群が互に gene を交換し得るか否かが一つ標準と考へられる。直接に又は間接に gene を交換できるものを凡て一つの Coenospecies と呼び，異る coenospecies は gene を交換できない。又互に生存し結實する子孫を自由に造る事のできるものを一つの Ecospecies とし，異なる ecospecies との雜種は sterile な子孫を殘すに過ぎない。更にこの下に Ecotype, Ecocline, Microtopotype 等の單位が考へられる。この様にして明かにされた事實は分類學にとつて非常に重要な資料となる。併しながらこれ迄の種 (Species) の觀念を全く廢棄して今直ちに coenospecies 又は ecospecies の如き考を全植物に用ひるのが正いとする様な行き過ぎがあつてはならない。實驗分類學に於ける單位も亦今迄の種や變種の場合と同様に何れともはつきりしない中間のものが出て來る事がある。從來の分類，殊に種以下の分類をこの方法で再檢討する事は必要であるが，實驗分類學は今迄の分類學を根底から覆すものではなく，これが改訂に役立ち，又その正しさを證明する場合も多いのである。更に正統分類學は理論のみでなく實際的な面をもつ學問である點を見逃す事はできない。如何に優れた理論があつても，全世界の植物にそれが適用されて皆が首肯し實際に用ひ得る分類ができなくては役に立たないのである。分類學が實用から出發した限り，過去の歴史と記錄を無視する事は不可能であり，これ等の資料に基いて更にその植物群に對し凡ゆる方面からなされた新研究を綜合して從來の缺點を補ひ，ここに新しい分類學を展開する事が今後の分類學者の務である。實驗分類學の研

究結果を如何に現實の分類に取り入れて行くかといふ事こそ我々に課せられた仕事である。若し各方面の研究結果と相關 (correlate) した標徵 (criteria) が，最も分り易い外部形態の性質に見出し得るならば，矢張りそれを用ひた分類が一番役に立つ。實驗分類學はその理論的根據を說明する一資料である。

分類には形質 (character) の外に起源 (origin) を考へるべきか否かも問題である。全く同一の genotype をもつた雜種でも兩親が異る場合があり，逆に同じ兩親から異つた形質のものが出來る。凡ての植物の起源系統を人間が將來どの程度迄確實に追求する事が可能かといふ事が先決になる。

學名に就ても命名規約に對する改訂意見から，種·亞種·變種の意義に對して多くの論議が交されて居る。現行命名規約が色々の缺點を有し，又一部の者によつて濫用された事は事實である。種 (Species) といふものも決して同一の內容をもつた單位では無く，白花品の如きものに一々學名を與へる理論的根據が疑はれる。併し一方學名が植物學の進步に貢献した事實と，若しこれが無くなつた時の不便と混亂とを思つて，分類學者は多くの困難と世の批判を甘受しつつ國際的に協力し，これが改善に努力してゐるのである。學名の問題は決して分類學者の主要な仕事ではない事勿論である。併し研究の結果が學名の變更によつて表現される事が屢々ある爲，一部の誤解を招く場合がある。又一部には本末を顚倒して初めから學名の變更を主眼とするかの如き行動をするものがあるのは遺憾である。分類學者は凡ての植物の學名を一日も早く安定させ，少くも文献や標本による改訂を無くして，この割の惡い暇のかかる仕事に終止符を打つべく急いで居るのである。外國にはその例を見ない事であるが，採集家が專門家を無視して自分の採集した植物に學名を與へ配布範圍の非常に限られた印刷物に載せて誇りとする如き，日本の分類學に疑惑と汚點を殘す行ひは早く是正されねばならず，專門家も亦その指導の責任の一半を負ふべきである。

今日の分類學者は 10 の新種より一の既知種を扱つた論文の方が遙かに努力を要し價値のあるものが多い事をよく經驗して居る。生植物に就て實驗的に解決すべき問題か山積し，又分類に理論的裏付が必要である事も分類學者自身が最もよく知つて居る。併しそれ等に手を付ける前に實際に一應解決しておかねばならない問題が未だ餘りにも多く，時間と費用の餘裕がなくてそこ迄手が廻らぬといふのが實狀である。我々は今迄の整理を行ふと同時に，これと平行して新しい有力な方法による研究を進める時期に達して居る。學問は他からの銳い批判を受けて初めて進步するものであり，分類學者も自から反省すべき多くの點を持つて居る。併し今日の分類學の內容を知らずしてする徒な批判は役に立たない。

現在植物學は非常に分化して居るが，分類學者はこれ等凡ての學科の研究に特別な注意と期待とをもつて居る。同じ植物群に對し，たとへ方法と目的とを全く異にした研究が行はれたにしても，その結果は必ず互に役立つものである。正統分類學のとつて來た

方法と實驗的な方法とは非常にかけ離れて見えるが，將來に於ては兩者は一體となつて發達するであらう。割居主義を捨てて他の專門の研究を互に理解し利用してこそ新しい道が拓けてくる。分類學者は他の分科の專門家と積極的に協力し，又世界の學者と手を握り，且つ採集家と密接に連絡して進むべきである。同時に植物の利用に關しても應用分類學（Applied taxonomy）を確立して，應用諸學科との密な連絡が切望される。我々は非常に廣い知識を必要とし，多年に亙つて蒐集された資料を充分に活用し，且つ他學科に於ける最新の研究を實際に取り入れるといふ極めて困難な仕事に直面して居る事を自覺すべきである。

○ウナヅキギボウシ(新變種)について　（前川文夫）

土佐の中央部の山間の地，物部川，吉野川上流，鏡川，船入川等の川沿ひの崖にはトサノギボウシ（*Hosta tosana* F.Maekawa）が群生する。これは仁淀川以西から日向南部へかけて分布するヒウガギボウシ（*H.Kikutii* F.Maekawa）と共に蕾が上つてくる時には苞がたくさん重つたまゝ鳥の嘴のようになつているので著るしい。トサノギボウシでは苞が稍ゝ短かいので，その程度が弱く，又花冠が厚味を増している違いがある。處が土佐の東部の魚梁瀨の谷や阿波の海部川沿ひの崖には花容と葉狀とはトサノギボウシの範圍だが花莖はその根本に近いところから急にカーブしている一群ばかりがある。これは崖にふさはしい形質だが固定していて東京で鉢に栽培してもやはり花莖は急に曲るために鉢の緣に無理にこすりつける位になる。如何にも鴨か何かが首を下げて伸ばした形であつて，著るしいので一變種として記載する。遠く飛んで紀州瀞八丁にもあるのは面白い。材料を提供された保井コノ博士，分布を確められた山脇哲臣氏，京大の標本をみるのを許された小泉源一教授に御禮申上げる。

Hosta tosana F.Maekawa var **caput-avis** F.Maekawa var. nov.—Ex *H. tosana* differt foliis tenuioribus, scapo ex basi abrupte arcuato-dependente, floribus minoribus.——Hab. Sikoku, prov. Tosa, Yanase (planta viva in horto Dr. K.Yasui No. 332-Typus); ibid. (No.330—f. *leucoclada* f. nov.—Flores albi); prov. Awa, ad ripas fluvii Kaibe (T. Yamazaki); mt. Tsurugi (Z.Tashiro in herb. Kyoto Univ.); Hondo prov.Kii, Dorohacchô (G.Koidzumi in herb.Kyoto Univ).

○第七回萬國植物學會議は 1950 年にストツクホルムで開かれる

第七回萬國植物學會議は 1940 年にスエーデンのストツクホルムで開催豫定の處，戰爭で中止となつたが，その準備委員會はその儘存續して，1946年10月に會合し改めて，1950 年 7 月に開催することを決めて六ケ國語で書かれたスマートな印刷の趣意書が 2 月に日本に送られて來た。

それによると會議の議長には Fries 教授は老齢の故で辭退し，ゲテボルク植物園長の Skottsberg 教授がなる。

會議は次の 13 部會に分れている。（　）內は係の名。1）農學．2）細胞學．3）實驗生態學（Turesson 教授）．4）遺傳學（Müntzing 教授）．5）形態學及解剖學（Fagerlind 博士）．6）菌類學及細菌學．7）古生物學（Florin 教授）．8）植物地理學（Du Rietz 教授）．9）植物病理學．10　生理學（Lundegardh 教授）．11）隱花植物分類學（Nannfeldt 教授）．13）顯花植物分類學（Hultén 教授）．13）命名規約（Hylander 氏）．早く晴れて參加できる日を待ちたいものである。